

# ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	酒巻 和子
主な担当科目	音楽芸術運営特別演習① 音楽と文化, 音楽評論概説, 課題研究Ⅰ, 課題研究Ⅱ/Ⅲ, 芸特応用研究Ⅰ, 芸特応用研究Ⅱ, 作曲家・作品研究_B, 作品研究特殊講義Ⅳ, 西洋音楽史Ⅰ_A, 西洋音楽史特殊講義_C, 卒業研究, 博士研究指導_音楽芸術表現領域
2024年の教育目標・授業に臨む姿勢	音楽学、特に西洋音楽史に関する科目を中心に担当している。学部と短大では、西洋音楽史や、主要な作曲家・作品についての基礎的な専門知識を身につけることが科目の目標でもある。授業では、学生がさまざまな音楽に対して関心を深め、学修意欲を高めることができるように努めている。大学院では、各科目の目標について学生の自覚を促しながら、学修成果が確実に身につくよう、主体的な研究方法等についても支援する。卒業研究や修士論文について、適切な指導ができるように努める。
2024年の教育に関する自己評価	短大の「西洋音楽史Ⅰ」で例年実践している毎回のコメント用紙は、学生の理解度を確認するために活用できた。定期的な「まとめ問題」の課題提出も無理のない授業外学修に結び付いたと思われる。「作曲家・作品研究」での授業内発表は、学生の大きな自信につながる事がわかった。大学院修士課程の「西洋音楽史特殊講義」でも授業内発表を取り入れたが、内容の充実とともに時間管理が課題となった。卒業研究、修士研究、修士論文いずれも、十分な成果を認めることができた。
2024年のFD活動に関する自己評価	FD副委員長として、年間スケジュールや企画、年間テーマについて検討した。3月と4月には、大学院FD研修会を実施することができた。9月12日の第2回FD全体研修会はFDSD合同研修会として実施され、新学長、理事長、新学部長、副理事長による講話が実現した。続く分科会では、教員と職員とで構成された28の小規模グループが実りあるディスカッションを展開した。所属する分科会(音楽学、音楽と社会)のFD堅守会にも積極的に参加し、情報共有ができた。
授業改善のために取り入れた研修内容	4月のFD全体研修会でとりあげられた「授業におけるICTの活用について」の内容は、具体的に参考にして役立っている。また2024年度のFD年間テーマである「新しい時代の大学人に求められることとは」「これからの時代をしなやかに生きていくための教育とは」は、どちらも、大学での教育にかかわるものとして必要な姿勢について考えるきっかけになった。

## 2024 年度(前期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:0081 教員名:酒巻 和子

### 1)アンケート結果に対する所見

前期の対象科目は大学院修士課程の「西洋音楽史特殊講義」であった。必修科目であり、年度当初に実施するプレースメントテストの結果にしたがってクラス分けをしている。昨年度43.5%だった回答率を上げることを課題とし、これについて今年度は53.6%と約10ポイント上昇したが、引き続き課題としたい。担当クラスは昨年度と同じ上級クラスで、結果についても(設問の文言に一部微修正があったものの)、ほぼ同様の傾向が読み取れた。いずれもわずかな変化ではあるが、数値の高くなった設問はQ5「興味や関心をもって出席している」とQ9「授業内容を研究に役立てたい」であり、反対にQ7「ものの見方が広がった」で低くなった。

その理由として、ひとつには学生による授業内発表があると推測できる。時間管理が難しいため、配付資料を充実させることによりシラバスとの両立を図った。しかし授業内容を削減せずに進めようとしてしばしば展開が速くなってしまったことがあったのは確かである。自由記述からも、専門の異なる学生の発表は興味深いし、自分自身も研究テーマと結び付けた発表ができたことはよかったが、半期で西洋音楽史全体を扱う授業そのものの範囲の広さと授業展開の速さに大変だった様子をうかがうことができた。

### 2)要望への対応・改善方策

各回の内容がしっかり伝わるよう、わかりやすい授業のための工夫を続けるとともに、大学院の学生には、自分で学修する姿勢や具体的な学修方法についてさらに指導することも大切と思われる。さまざまな図書館のデータベースの利用方法についても紹介したい。一部指摘のあったオーディオの不具合については、現在までに改善したと確認できている。授業外学修の指示についても、学生の意欲がさらに向上するような内容にするよう努める。

### 3)今後の課題

学生による授業内発表については、無理のない範囲で続けたいが、その場合もさらに時間の管理に注意する。専攻にかかわらず、学生たちが修士課程で学ぶ意味を考え、積極的な学修の習慣を身に付けることができるように支援することが課題といえる。

以上

## 2024 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:0081 教員名:酒巻 和子

### 1)アンケート結果に対する所見

個人で担当した通年科目で対象となった「西洋音楽史Ⅰ」(短大 A クラス)、「作曲家・作品研究」(学・短 B クラス)について確認した。いずれも 1 年次の必修科目として設定されており、学生にとって大学での学びを初めて経験するものである。

「西洋音楽史Ⅰ」は、短大全コースの必修科目である。「毎回内容の濃い授業」という記述もあったように、内容は広範囲で、なかなか省くことのできない事項が多い。「すぐに多くを覚えるのは難しいが、入学して学びたいところだったので時間をかけてでも身に付けたい」という記述は、まさに大事なポイントを理解してくれているように思う。また、受講生はいわゆるクラシック音楽に親しんできた学生ばかりではない。「この授業を通していろいろな曲を知り、楽しみ方や聴きどころも分かり、クラシック音楽を楽しめるようになりました」「主科にも良い影響がありました」という声があり、恐らくなじみの薄いジャンルの音楽史に一生懸命取り組んだであろうことが窺えた。「まとめのプリントなど配付資料のおかげで勉強がやりやすかった」という記述からは、授業プリントのほか、定期的な課題とそのフィードバックを継続したことが有効だったと確認できた。

「作曲家・作品研究」は、音楽と社会コースおよび音楽教養コースの必修科目、短大の全コース選択科目である。扱う作品をバロック時代以降とし、20 世紀のポピュラー音楽にも触れ、なるべく映像と音楽を交えた鑑賞の時間を設けている。「作曲家一人一人を深掘り出来た」というコメントが「西洋音楽史Ⅰ」とは異なる科目の特徴と学修成果を明確に示してくれた。さらに学生によるプレゼンテーションと学生相互によるフィードバックコメントを取り入れていることも、この科目の満足度の高さの理由と考えられる。

### 2)要望への対応・改善方策

音楽をかけながら補足の解説をしたことがあり、「マイクを使っていただけると」という記述があった。話の内容がよく伝わるよう、今後注意したい。

### 3)今後の課題

「作曲家・作品研究」は、2025 年度から「作曲家・人と作品」として半期科目に変更された。これまで同様、高い満足度を維持できるようにしたい。大学院も含め、その他西洋音楽史に関するさまざまな担当科目においても、知識だけでなく、学生ひとりひとりが興味や関心を深めて学修意欲を向上させられるような指導を実現することが課題と考えている。

以上